

オバデヤ書ノート

2024 版

Dr. Thomas L. Constable

紹介

タイトルと作者

旧約聖書の他のすべての預言書と同様に、この本のタイトルは明らかにその著者の名前に由来しています。オバデヤという名前は、議論されているヘブル語での名前の形式(発声)に応じて、「ヤハウエの僕」または「ヤハウエの礼拝者」を意味します。旧約聖書にはダビデ時代から捕囚後の時代まで、この名前を持つ人物が13人いますが、筆者は他の12人の一人ではないと推定されています。彼を他の人物の一人と同一視しようとする試みは満足のいくものではなかったため、彼はそうではなかったといえます。

少数の学者は、このオバデヤは個人の名前ではなく、主(ヤハウエ)の正体不明のしもべまたは崇拜者である筆者の象徴的な称号であるという見解を支持しています。他の預言書には著者の固有名が記されているため、これはありそうもないことです。一部の学者は、マラキ(「私のしもべ」)も固有名ではなく称号であると信じています。

オバデヤが正確に誰だったのかは謎のままです。ケイルは、アハブ王に仕え、エリヤと出会ったオバデヤ(第一列王記18:3-16)が筆者であると信じていました。通常、各預言書の冒頭には、その著者に関する何かがある名前と一緒に付けられます。一般的には、その人の父親の名前、先祖の一部、および/または彼の故郷です。この記述情報は、預言書の中でオバデヤ書とマラキ書の2冊だけにありません。

オバデヤが誰であれ、彼は優れた文学的才能を持っていました。彼は短い預言の中で、画像、修辭的な質問、皮肉、繰り返し、様々な形の並列処理の能力を使用しました。

統一性

一部の学者は、この小さな本(聖書には載っていないが旧約聖書の中で最も短い本)は、二人以上の身元不明の預言者が語った預言を集めたものであると主張しています。この見解には2つの理由があります。まず、オバデヤの正体が不明瞭であるため、この本の学習者の中には、オバデヤは特定の個人の名前ではなく、主の僕としての預言者全般を表す称号であると結論付けている人もいます。第二に、本の内容は2つから5つの啓示(神の宣告)で構成されている場合があります。形式批評家は、裁きの神託、悔い改めの神託、救いの

神託という 3 つのタイプの神託を特定しています。^[2] このため、一部の学者は、2 つ以上の預言や 2 つ以上の預言者を仮定するようになりました。

しかし、オバデヤは一般的なヘブル語の名前であり、他の預言書には著者の名前が付いているため、オバデヤという名前の一人の預言者がその本全体を書いたと考える方が自然です。さらに、他の多くの執筆預言者がいくつかの神託を記録しているため、実際にこの本が複数の神託で構成されている場合、オバデヤという名前の一人の預言者がこの本で同じことをしたと考えるのが合理的です。短い本全体が 1 つの構成としてうまくまとまっています。^[3]

且付

彼の名前がオバデヤだったと思われること以外、著者については何もわかっていないため、この本の年代を特定し、オバデヤがどこに住んで奉仕していたのかを特定することは非常に困難です。

「旧約聖書の中で最も短いこの本は、わずか 21 節からなり、これまでの預言の中で最も難しいとされている。」^[4]

預言者がいつそれを書いたかについては 3 つの手がかりがあります: (1) この本の中での歴史的出来事への言及、(2) ヘブル語正典におけるこの本の位置づけ、(3) オバデヤの他の旧約聖書の預言者の著作への引用または暗示の可能性、および他の旧約聖書におけるオバデヤへの引用または暗示。これらの各手がかりについての説明は次のとおりです:

まず、この本の中での歴史的出来事への言及に関して、オバデヤは、エドム人がエルサレム侵攻の成功を喜んで、明らかに最近の過去の時期について言及しました(10-14、16 節)。預言者執筆の奉仕活動中に、南ユダ王国の首都エルサレムが侵略を受け、敗北を喫したことを私たちが知る機会が少なくとも 7 回あります。その 1 つは、彼が言及した次の出来事である可能性があります:

1. レハブアムの治世中(紀元前930-913年、第一列王記14:25-26、第二歴代誌12:2-9)
2. ヨラムの治世中(紀元前853-841年、第二列王記8:20-22、第二歴代誌21:8-10、16-17、アモス1:6参照)
3. アマツヤの治世中(796-767; 第二列王記 14:13-14; 第二歴代誌 25:23-24)
4. アハズの治世中(紀元前732-715; 第二歴代誌28:16-18)
5. エホヤキムの治世中(紀元前609-598年、第二列王記24:1-4、第二歴代誌36:6-7)

6. エホヤキンの治世中(紀元前598-597年、第二列王記24:10-16、第二歴代誌36:10)
7. ゼデキヤの治世中(紀元前597-586年、第二列王記25:3-7、第二歴代誌36:15-20、哀歌4:21-22、詩篇137:7参照)

数人の学者は、オバデヤの神託全体が地上的かつ終末論的(終わりの時)の成就を待っていると提案しています。^[5]この見解は広く受け入れられていません。

これらの過去の侵略と敗北のうち、エドム人の行動に関するオバデヤの説明に適合すると考えられるのは、ヨラム王の治世中のものと、紀元前586年にネブカドネザルとバビロニア人がエルサレムを破壊したゼデキヤの治世中のものです。^[6]ほとんどの学者は、これらの時代のいずれかが視野にあると信じており、紀元前586年のエルサレムの滅亡も視野にあると信じています。^[7] 2番目に一般的な見解は、オバデヤが言及したのはヨラムの治世中のエルサレム侵攻であるというものです。^[8]この見解では、オバデヤがエリヤとエリシャと同じ時代を生きた人であると考えられます(第二歴代誌 21:12-15参照)。

オバデヤの預言の日付を知るための 2つ目の手がかりは、ヘブル語正典におけるこの本の位置です。もちろん、小預言書は大預言書よりも短いため、小預言書(英語ではマイナー)と呼ばれます。^[9]ユダヤ人は、便宜上、また迷子預言者を避けるために、12人の小預言者すべてを1つの巻物にまとめました。ヘブル語聖書に登場する順序は基本的に年代順であり、この順序は英語翻訳を含む後の旧約聖書の翻訳にも引き継がれました。このことから、古代ユダヤ人はオバデヤ書を初期の預言書の一つとみなしていたと結論付けることができます。

ただし、順序は完全に時系列通りではありません。ホセア書が最初に置かれたのは、それが流刑前の小預言者の中で最も長いためであると思われる。同様のテーマや言葉が繰り返し登場することも、この秩序に影響を与えていると思われる。なぜなら、捕囚前の小預言者としては2番目に長いアモスではなく、ヨエルがホセアに続いているからです。アレン氏は、オバデヤがアモスに従うかもしれないと示唆したのは、それが「アモス 9章12節の事実上の注釈とみなされた可能性がある」からです。^[10] スチュアートは、オバデヤが「主なる神」(アドナイ・ヤハウエ、1 節)という名前を使用したため、オバデヤがアモスに従うのではないかと示唆しました。これは預言者の中ではあまり使用されない神の名前であり、アモスも使用しました。^[11]

「ヘブル語聖書の十二使徒の配置では、全体の順序を決定したと思われる年代順の原則は次のとおり:(1)アッシリア時代の預言者が最初に配置され(ホセアからナホムまで)、(2)次に続いてバビロニア時代の預言者(ハバククとゼパニヤ)、(3)シリーズは捕囚後のペルシャ時代の三人の預言者(ハガイ、ゼカリヤ、マラキ)で終わった。」^[12]

オバデヤの年代に関する3番目の手がかりは、ある預言者が別の預言者に依存していたという証拠です。オバデヤ書 1-6 章とエレミヤ書 49:9 および 14-17 章、およびオバデヤ書 10-18 章とヨエル書 1:15、2:1、32; 3:3-4、17、19 の間には類似点があります。^[13] オバデヤ書 9、10、14、18、19 章とアモス書 1:2、6、11-12、9:13 の間にも類似点があります。^[14] しかし、これらすべての場合において、オバデヤが他の預言者について言及したのか、彼らがオバデヤについて言及したのか、それらすべてが別の共通の情報源に依存しているのか、あるいは聖霊が各預言者に同様の言葉で自分自身を表現するように個別に導いたのかどうかを判断することは実際には不可能です。

幸いなことに、この預言の正確な日付を発見することは、それを理解する上で重要ではありません。

構成の場所と聴衆

オバデヤの懸念はエドム人がエルサレム侵攻を喜んでいることだったため、預言者が南ユダ王国に住んでいた可能性が最も高いと思われます。ほとんどの学者の考えはこれと一致しています。

オバデヤの関心はエルサレムであり、ユダに住んでいた可能性が高いので、彼の預言を受け取った最初の人々はおそらくユダの住民であったと考えられます。

歴史的背景

エドム人は、創世記に登場するホリ人(フル人としても知られる)を追放したエサウの子孫でした。ホリ人とアモリ人はカナンの元々の住民でした。

王政時代、ダビデはエドムを占領し、そこに守備隊を置き、エドムを奴隷の国とした(第一歴代誌18:12-13)。ソロモンは後にエドム近郊の南ユダに港湾都市エジオン・ゲベル(エラテ、第一列王記9:26-28)を発展させました。エドム王家の一員であるハダドはソロモンに反対し、エジプトに亡命政府を樹立しました(第一列王記11:14-17)。しかし、ユダはエドムに総督を置いたヨシャファテ王の治世中もエドムを統治していました(第一列王記22:47-48)。エドムは紀元前845年、エホシャファテの子ヨラムに反逆してユダからの自由を再び取り戻しました(第二列王記8:20-22、第二歴代誌21:8-10、16-17)。ユダのアマツヤ王は紀元前790年から770年にかけてエドムを部分的に奪回しました(第二列王記14:7)。ユダのウジヤ王はエジオン・ゲベルの港を奪還しました(第二列王記14:21-22)。アラム(シリア)は後にユダからエジオン・ゲベルを取り戻しました(第二列王記16:5-6)。その後、エドム人はユダのアハズ王の治世中に反乱を起こし、二度目にユダを攻撃しました(第二歴代誌28:17)。最後に、ネブカドネザル王がユダを攻撃したとき、エドム人はバビロニア人を支援しました(詩篇 137:7; エレミヤ 49:7-22; エゼキエル 25:12-14; 35:1-15)。^[15]

バビロニア人はユダに侵入し、そしてユダに対するかつての同盟国エドムへ侵攻した後、ナバテア人のアラブ人が首都セラ(ギリシャ語でペトラ)を占領し、残ったエドム人を南ユダに強制移住させ、そこに定住しました。紀元前4世紀にアレクサンダー大王がカナンを征服したことにちなんで、ギリシャ人はこの地域をイドメアと呼び、その住民をイドメア人と名付けました。

ローマ人がギリシャ人に代わってカナンの支配勢力となった後、イドメア人にある程度の主権を享受することを許可しました。イエス・キリストが生まれたときにパレスチナを統治していたヘロデ大王はイドメア人でした。その後、イドメア人は西暦68年から70年にかけてユダヤ人とともにローマ人に対する反乱を起こしました。彼らの敗北により離散し、民族としては消滅しました。これは彼らの国民に対する裁きに関するオバデヤの預言の成就でした。要約するなら、エドムのイスラエルに対する敵対の歴史は長く一貫していたということです。

目的と特徴

オバデヤは、エドムに対する神の裁きが来ることを告げ、イスラエルの民に神が約束された将来を思い出させ希望を与えるために手紙を書きました。

「外国に対する預言的な神託は、破滅の言葉に満ちているとはいえ、暗黙のうちに神の民への希望を与えるメッセージでもある。そのような神託は、攻撃を受けている国家の予測された滅亡が、回復され、浄められたイスラエルが再び神が植えられた全ての花として開花する道を開く時を期待している。オバデヤのメッセージはこのパターンに当てはまり、ある意味ではそれを典型的にさえ示している。」^[16]

「他の預言書では外国に対するたった一つの神託だったものが、オバデヤ書では独立した本になっている。」^[17]

ほとんどの聖書学者はエドムを、イスラエルとヤハウェに対して組織されたすべての勢力の典型的かつ代表的な人物だとみなしています。^[18] 学者の中には、エドムを肉体の一種と見なし、オバデヤを最終的な滅びの預言と見なす人もいます。^[19]

「ある意味、オバデヤは預言者全員のメッセージの縮図である。」^[20]

「エドムは……最初から、つまり出エジプト後から終わりまで、つまり流刑後まで、粘り強く、むしろ常に敵対的であった。この要素自体が、これほど小さな国が預言の神託の中でこれほど定期的に、さらには顕著な言及を受けるには十分だろう。しかし、エドムの敵としての卓越性は、イスラエルの兄弟国家としての歴史的地位のゆえに、さらに注目に値するものであった(創世記 25 章)。したがって、エドムをイスラエルの敵の中で非常に際立たせた要因は少なくとも3つあり、時にはそれが可能になることもあった。(1) エゼキエル書 35:5 でほめかされているような、その敵意の時系列的な長さ、(2)その敵意の一貫性と激しさ(オバデヤ10-14章のような)、(3)敵意の「反

逆的」な性質(アモス1:11のように)これらの特徴を完全に共有する国家は他にはない。[\[21\]](#)

「…古代の非超大国のうち(つまり、エジプト、アッシリア、バビロンを除く)エドムは、外国に対するさらに別個の神託の対象となっている(7つ[つまり、イザヤ21:11-12; エレミヤ49:7-22; エゼキエル 25:12-14; 35; アモス 1:11-12; オバデヤ; マラキ 1:2-5])およびより簡潔または通り過ぎた敵対的な言及(4つ[すなわち、イザヤ 11:14; エレミヤ25:21; 哀歌 4:21; ヨエル 3:19])他のどの国民よりも預言書の中に記されている。」[\[22\]](#)

「エドムは、他のどの国よりも多くの後者の預言者の書物で注目を集めている:イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、マラキ書[つまり、16の聖句:イザヤ書11:14; 21:11-12; 34; 63:1-6; エレミヤ9:25-26; 25:21; 27; 49:7-22; エゼキエル 25:12-14; 32:29; 35-36; ヨエル 3:19; アモス 1; 9:12; オバデヤ; マラキ1]。しかし、これは、エドムの神託が他の国々に対する神託よりも多くの空白を占めているという意味ではない。この事実だけでも、預言者たちが他のどの国民よりもエドムを憎んでいたなどと主張して、この事件を誇張しないよう警告する必要がある。」[\[23\]](#)

聖書の中でエドムは、超大国を除く他の敵対国家よりも多く言及されています。

「エドム人はイスラエルの歴史の中で一貫して敵対的な役割を果たしたので、『外国に対する神託』という預言文学のカテゴリーには必ずエドムに対する判決の予言が含まれることになる。実際、エドムは旧約聖書において『敵対国家』の一種の換喩となっている。」[\[24\]](#)

換喩とは、作家がある物(エドム)の名前を、それに関連する、またはそれによって暗示される別のもの(すべてのイスラエルの敵)の名前として使用する比喩です。

アッシリアがより大きなナホム書の主題であるのと同様に、エドムは小さなオバデヤ書の主題です。アッシリアもヨナ書の主題ですが、ヨナはアッシリア全土よりも首都ニネベに焦点を当てています。

新約聖書の筆者たちはオバデヤ書を引用、またはオバデヤ書に対し言及をしていません。

他のすべての預言書と同様に、神の契約への言及が重要な背景を形成しています。古代近東に住んでいた人々は、国々が互いに結んだ契約、契約の忠実さによる祝福、そして契約の不忠実さによって起こる罰について知っていました。この人生観は、すべての預言書の中で非常に際立っています。

概要

- I. エドムの来たるべき裁き1-9節
 - A. 神託の概要 1節
 - B. エドムの防御の突破 2-4節
 - C. エドムの宝の略奪 5-7節
 - D. エドムの指導力の破壊 8-9節
- II. ユダに対するエドムの罪 10-14節
 - A. 告発状 10 節
 - B. 告発の説明 11-14節
- III. イスラエルの主権の回復 15-21節
 - A. エドムと諸国民の裁き 15-18節
 - B. イスラエルによるエドムの占領 19-21節

多くの有能な解説者は、オバデヤ書は古代近東で一般的だった契約訴訟の演説形式に従って書き記されたと信じていました。^[25]他の多くの預言者も使用したこのタイプのメッセージには、特定の定型的な部分があります。これらは、最も基本的には、判決の場面の説明と、その後の裁判官による演説です。この演説には通常、被告への演説(告発に基づく非難や被告には弁護の余地がないという陳述を含む)、有罪の宣告、判決が含まれます。ニーハウスはオバデヤを契約訴訟として次のように概説しました。^[26]

- I. 題目 (1a)
- II. 裁きの場面の説明(国々が戦いのために立ち上がった、1b)
- III. 裁判官の演説 (2-21)
 - A. 三文 (2-9)
 - 1. 第一文 (2-4)
 - 2. 第二文 (5-7)
 - 3. 第三文 (8-9)
 - B. 3つの有罪宣告 (10-14)
 - 1. 第一の宣告 (10)
 - 2. 第二の宣告 (11)
 - 3. 第三の宣告 (12-14)
 - C. 国々に関する文 (15-16)
 - D. 回復の約束 (17-21)

メッセージ

この本がたった1章で構成されているという事実自体が、その重要性を私たちに警告するはずです。もしそれが重要でないなら神はこの書を保管しなかったことでしょうし、それはとつくの昔に消えていたでしょう。また、その短さにより、そのメッセージを発見する作業が簡素化されます。他の聖書の本と同様に、この本にも、今日の私たちだけでなく、何世紀も前の最初の読者にとっても重要なメッセージが含まれています。

オバデヤは、ヤコブとエサウの子孫であるイスラエル人とエドム人の間で生じた兄弟間の対立と国家的対立の頂点を明らかにしています。この2人の少年とその子孫の間の争いは、彼らが生まれる前から始まりました。幼児たちは母親リベカの胎内で苦しみました(創世記25:22)。この対立を説明する際、神はヤコブを「愛している」が、エサウを「憎んでいる」と言われました(マラキ1:2-3)。愛と憎しみという言葉は、二人の息子に対する神の選択の目的を反映しています。神がヤコブを愛しているがエサウを憎んでいると述べたとき、神はエサウを祝福することを選ばず、ヤコブを祝福することを選んだことを意味していました。この言明は、違いを明確にするために正反対のことを表現しています。旧約聖書の中で、神は誰かを祝福することを選んだと言いたいときに、その人を愛しているとよく言われました。これは古代近東における契約の用語であり、当時の世界のその地域の人々は、愛することと憎むことにはこれらの意味があることを理解していました。

ヤコブの系図は最終的にイエス・キリストを生み出しました。エサウの系図はヘロデ家を生み出しました。イエスもヘロデもユダヤ人の王でした。イエスはヘロデ・アンティパスに質問されても決して話しかけませんでした。一度だけメッセージを送りました(ルカ13:32)。この対立はエドム人とイスラエル人の関係を一貫して特徴付けていました。

オバデヤ書の全面にエサウが登場し、背景にはヤコブがいます。ヤコブとその子孫は苦しみと刑罰を経験しましたが、彼らは最終的に回復と用いられる器としての運命を辿ることになります。一方エサウとその子孫は高慢で頑固、そして反抗的であり、彼らは最後には究極の滅びを経験することになります。皮肉にも、もともとヤコブのほうが魅力的ではなく、エサウのほうが魅力的でした。

しかし、神は、二人の選択を見た上で、彼らの人生に望んでいたものを生み出すために、自然なことを却下されました。神の主権と人間の選択は非常に密接に絡み合っており、私たちがそれらを離すことは不可能です。聖書は一貫して、人間の出来事の過程において現実的かつ重要な要素として提示しています。

オバデヤは、エサウの子孫であるエドムの滅びの物語を語っています。それはまた、エドムが指示をし、象徴していたすべてのものを神が滅ぼすであろうことを示しています。エドムはエサウを国家規模に投影したものです。オバデヤでは、エサウの本質的な悪、その悪の最高の現れ、そしてその悪の避けられない結果が見られます。しかし、私たちはまた、「エサウの山」(8、9、19、21節)、つまりエドムで最も注目すべき地形であるセイル山にも希望の光を

垣間見ることができます。この山はしばしば旧約聖書のエドム国家を表しています(換喩による)。

エサウとエドムの本質的な悪は高慢さでした。これは3節に表れています:「岩の裂け目に住み、高いところを住まいとする者よ。おまえの高慢はお前自身を欺いている。おまえは心の中で言っている。『だれが私を地に引きずり降ろせるのか』と。」エドム人は、古代セラの近く、後にペトラとして知られるようになった町の周囲の岩だらけの人里離れた地域に住んでいました。後にエドム人を追い出したアラビア人であるナバテア人は、実際にペトラを固い岩から彫り出しました。

ナバテア人がこの地域を占領する前にこの地域を占領していたエドム人の居住地は、彼らについて多くを物語っています。彼らは自立した孤立主義者であり、猛烈に孤立していました。

「この自給自足は、古代貿易のいくつかの主要ルートの中でのこの国の位置によってさらに悪化した。」[\[27\]](#)

ある意味、エドム人は現代の生存主義者に似ていました。彼らは独立していることを好みました。彼らは他人を信用していませんでした。彼らは自分たちの運命をコントロールしたいと考えていました。彼らは、そこからすべての敵から身を守ることができると考え、荒野の一部に避難しました。そして彼らはとても誇りに思っていました。

プライドは、対処するのが最も難しい罪の一つです。嘘、窃盗、姦淫、その他のあからさまな罪に対処する方がはるかに簡単です。一方、プライドは、私たちが十分に賢ければ、あまり多くの人に気づかれずに実践できるものです。実際、私たちは高慢になっていることさえも自身で気づいていない可能性があります。高慢は、さらに多くの明白な罪を生み出す根源です。プライドとは「私(または私たち)は神なしでもやっていける」という態度です。エドム人は偶像を持ちましたが、生ける真の神に屈しませんでした。エドム人は自分たちが無敵だと考えていました。

エサウは神の約束など何の役にも立たず、彼の子孫も神なしでも十分やっていけると考えていました。新約聖書はエサウを「神を持たない人」(ヘブル人への手紙12:16)、文字通り「神殿に反対する人」と呼んでいます。神を信じない人は、自分自身の動物的能力に誇りを持ち、その欲求を満たすために生きているため、霊的なことには何の関心も持ちません。極度に誇り高い人は、あたかも自分が神から独立しているかのように行動し、決して祈らず、礼拝せず、天国のことを決して考えません。もちろんクリスチャンさえもこのように生きることができます。

エドム人は鷲のように高く巣を作りました。その高さは星々の間にあるように見えました(4節)。鷲は聖書の中でしばしば神と比較されます。エドム人の場合、彼らは自らを神格化し、

自らを神としたのです。彼らはエドムの荒野の崖の上に家を建てることで、危険や敵から身を守ることができると考えました。しかし、神は彼らを引きずり降ろすと言われました(4節)。

高慢がエドムの本質的な罪であるとすれば、暴虐はその罪の最高の現れでした。エドム人は自分たちを守るだけでなく、他人を虐待し、他人を傷つけることを喜んでました。10節と11節には、「あなたの兄弟、ヤコブの暴虐のために、恥がおまえをおおい、おまえは永遠に断たれる。他国人がエルサレムの財宝を奪い去り、外国人がその門に押し入り、エルサレムをくじ引きにして取ったその日、おまえは素知らぬ顔で立っていた。おまえもまた、彼らのうちの一人のようであった。」とあります。エドム人は兄弟のイスラエル人が苦しんでいるのを見て、満足して何もしなかつただけでなく、喜んで苦しみをさらに与えていたのです。

イスラエル人はヤハウエへの信仰を表しました。彼らはこの理想を支持しましたが、証言において一貫性がなかったことは明らかです。それにも関わらず、彼らは主を信じ、主に従い続けました。イスラエル人に対するエドム人の不自然な暴力は、イスラエル人自身だけでなく、イスラエル人が代表するものに対する彼らの憎しみを明らかにしました。それで、イスラエル人が苦しんだとき、エドム人は喜びました。彼らは肉的にはイスラエル人の兄弟であったにもかかわらず、イスラエル人が支持するもののために一貫して彼らに反対しました。例えばエドム人はイスラエル人が約束の地に向かう途中で自分たちの領土を通過することを拒否しました。

そのような神を信じない高慢の結果、神の民に対する暴力がもたらされ、神の報復がもたらされます。エドム人は自分たちは安全だと思っていましたが(4節)、神は彼らを倒すと言われました(4節)。

「その日には 一主のことば一私はエドムから知恵ある者たちを、エサウの山から英知を消し去らないであろうか。テマンよ、おまえの勇士たちは気をくじかれる。虐殺され、エサウの山から一人残らず断ち切られる。」(8-9節)。その後エドム人が無視できと思っていた神は彼らのところを訪れ、彼らを滅ぼすこととなります。神は驚よりも高いのです。彼はエドム人が愚かにも安全を信頼していた山々を創造した方です。

神はエドム人が立てた計画を覆すことによってエドム人を滅ぼすでしょう。「おまえと同盟を組む者たちがみな、おまえを国境まで送り出し、親しい友がおまえを欺いて征服する。」(7節)。エドム人はまた、自分たちの安全をも神よりも他国に信頼していました。しかし主はエドムの信頼の対象そのものを用いてエドムを滅ぼそうとしました。神はこれを行うために、ご自身が直接介入するのではなく、人々が依存する偽りの神を利用することがよくあります。不敬虔な同盟者は、最終的には敵であることが判明します。たとえば、犯罪者は自分の刑期を短縮するために他の犯罪者の訴追の証人になることがあります。

いつものように、神は詩的な(タリオン的な)裁きでエドムを扱うでしょう。(J・シンドロー・バクスターはオバデヤを「詩的正義の預言者」と呼びました。[\[28\]](#)彼らは自分で蒔いたものを刈り取ることになるのです(ガラテヤ6・7-8参照)。エサウは肉に種を蒔きましたが、最終的にその

肉はエドム人を滅ぼす道具となりました。神は、「自分がしたように、自分にもされる」(15節)とされました。

しかし、この預言はエドムの滅びの約束で終わるわけではありません。それはイスラエルの最終的な勝利とイスラエルの神の正しさが証明されるという約束で締めくくります。オバデヤは、まず第一に、軽蔑されているイスラエルが誇り高い敵から救われるだろうと預言しました。「そのとき、ヤコブの家は火となり、ヨセフの家は炎となる。しかしエサウの家は切り株のようになる」(18節)。「救う者たちは、エサウの山をさばくため、シオンの山に上る」(21節)。その時、「王国は主のものとなる」(21節)。

世の民と信仰の民との争いは今も続いています。王国はやがて主のものとなります。これは、イエス・キリストが地上に再臨し、義の支配を確立するときに起こります。そして神は、ご自分の民の高慢で暴力的な敵対者たちと、彼らが支持するすべてのものを鎮圧されるでしょう。

新約聖書の言葉を借りれば、エドム人はイスラエルにとって最も「肉の」敵でした。したがって、この本は、エドム人だけでなく、歴史を通じて神の民のそのようなすべての敵の最終的な運命を示しています。旧約聖書の中にこの小さな本があるのはそのためです。教会にはエドム人がいます。クリスチャンにはエドム人がいます。この本は私たちに希望を与えてくれます。オバデヤの預言の成就として歴史上のエドム人をすでに滅ぼしたのと同じように、神は最終的にはすべてのエドム人を滅ぼします。

この本はまた、クリスチャンの読者に自分の心を吟味するよう求めています。私はどのような人間なのか？私はエサウに似ているのだろうか、それともヤコブに似ているのだろうか？ヤコブは完璧とは程遠い存在でしたが、神は彼をイスラエル、つまり最終的には神と共にいる君主に変えてくださいました。これらの兄弟と彼らに続く国々との違いは、ヤコブは将来に関する神の約束を大切にしていたが、エサウはすぐに気分が良くなる鍋のシチューを好んだということでした。

ヤコブは霊的なものを大切にしました。エサウは肉体的なものを大切にしました。あなたの人生の生き方、時間の過ごし方、行く場所、そして「一緒に過ごす」のが好きな人々は、あなたの価値観について何を示していますか？あなたは永遠の価値観を意識的に視野に入れて生きていますか、それとも単に今のために生きていますか？

神はヤコブでヤコブにされたように(創世記32:24-32)、またヤコブの子孫の歴史を通してヤコブにしたように、ヤコブを薪小屋に連れて行きます。しかし、神はご自分の民を懲らしめるでしょう。なぜなら、神には私たちの将来を握り、それに備えようと考えられているからです。彼はこの世のエサウをわざわざ訓練しようとはしません。神は彼らが物質的に成功し、安全な巣を築き、鷲のように飛び立ち、彼ら自身の神となり、信者たちを鼻で嘲笑し、さらには暴力的に迫害することを許すかもしれませんが、最終的には彼らに罰を与えられます。

少数のエドム人は典型的なエドム人の生活様式を捨て、ヤハウエを信じ、神の民の一員となるためにイスラエルに移住しました。イスラエルの異教の隣人すべてから来た少数の人々がこれを行いました。モアブの女ルツはその顕著な例です。ですから、どんな人にも希望はあります。悔い改める時間がある限り、個人にとって裁きは避けられないものではありません。それにも関わらず、エドム人が国家として代表していたものは神の裁きの下に置かれ、彼らは滅びました。

オバデヤの弟子の多くは、この本が旧約聖書のすべての預言書の重要なメッセージを要約したものであると指摘しています。それはすべての預言的な書物の背後にある大きな問題、すなわち誇りを扱っています。おそらくすべてのクリスチャンが対処しなければならない最大の問題はプライドです。私たちは神がプライドをどのように見ているかを覚えておく必要があります、この本は私たちにそれを思い出させてくれます。[29]

説明

I. エドムの来たるべき審判 1-9節

預言のこの部分は導入文で始まり、エドムの滅びを 3 つの方法で説明しています。

A. 神託の概論 1節

この節には、旧約聖書の預言書の中で最も短いタイトルであるこの本のタイトルと、エドムに対する主の布告の要約が含まれています。この啓示は預言者に幻として与えられました（ヘブル語でハズン、第一サムエル3:1、イザヤ書1:1、ナホム書 1:1 参照）。

「幻は、一般的な光景や見られるものとは明確に区別されるべきである。それはインスピレーションの結果であり、神ご自身によって与えられるものであるため、独自の重要性を持つものとして理解されている。」[30]

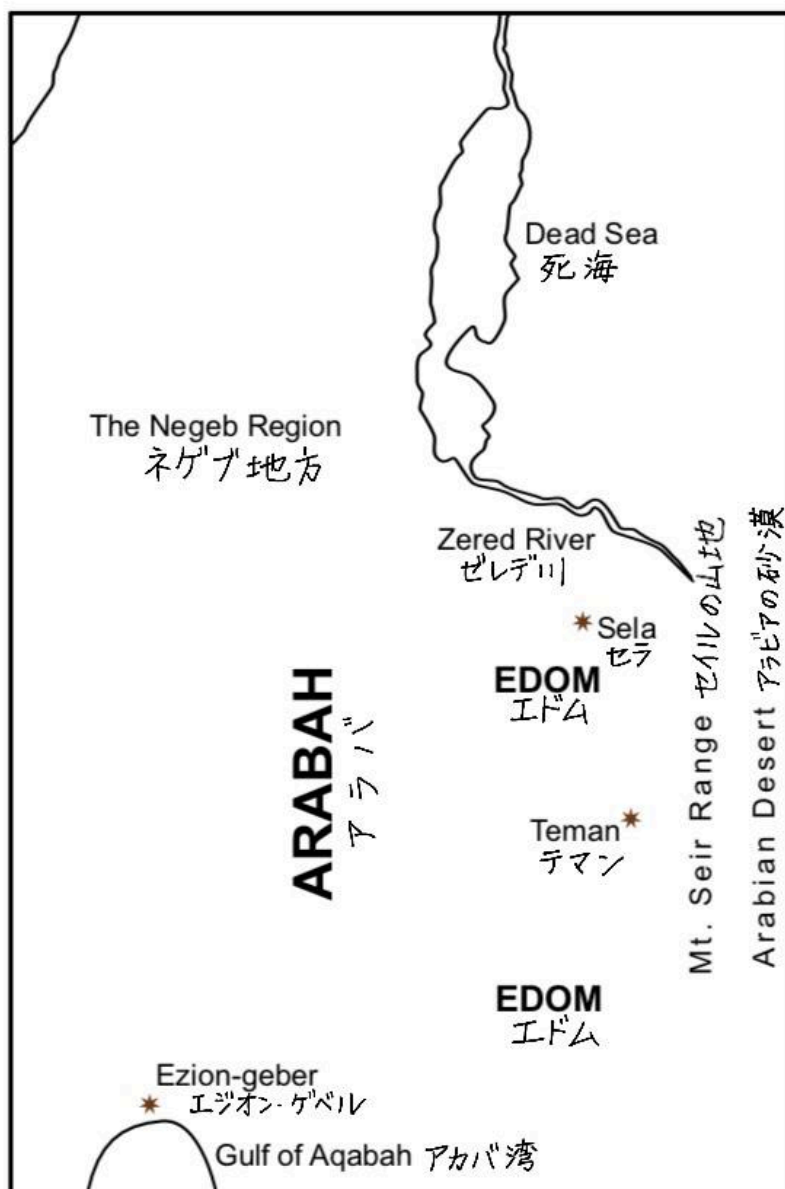
その幻は預言者オバデヤに現れました。その名前は「ヤハウエの僕」または「ヤハウエの崇拜者」を意味します。この説明の導入部で述べたように、オバデヤについては名前以外に何も知られていません。私たちは、この本のさまざまな手がかりから、彼がいつどこに住んで奉仕したかを推測する必要があります。

「神である主は、こう言われる」は預言書の中によく出てくる言葉です。該当する神託は預言者自身の想像からではなく、神の御心から生じたという強い主張です（第二ペテロ1:20-21 参照）。「アドナイ(すなわち、主権者)ヤハウエ」(創世記2:4等を参照)はエドム国家に関する宣言を行いました。これは主に対する珍しい称号(称号と名前の組み合わせ)です。それは、イスラエルの契約の神が世界と歴史の主権者であることを明らかにしています。

「ヤハウェはまさに主だった。この預言全体は、主としての主権の行使の具体的な一例を示している。」[\[31\]](#)

ラーベによれば、ほとんどの解説者はヘブル語の前置詞 *le* を「懸念する」という意味だと解釈しているという。しかし、彼はそれを「に」と訳すべきだと信じていました。言い換えれば、彼は主がこの預言をイスラエル人ではなくエドムに向けて語られたと信じていました。[\[32\]](#)

エドムはヤコブの双子の兄弟エサウの子孫から生まれた国民でした(創世記36・1参照)。エドム人はアラバの東、死海とアカバ湾の間、ゼレデ川の南、エジオン・ゲベル(エラト)の北の領土を占領しました。その東の境界はアラビア砂漠でした。エドムは、エドムの領土の北東部を占めていた著名な台地であるセイル山にちなんでセイルとしても知られていました。[\[33\]](#)



https://www.planobiblechapel.org/tcon/notes/html/ot/obadiah/graphics/obadiah_1.svg

主からの報告(メッセージ)を聞いた人々は神の民でした。オバデヤは彼らに話しかけ、「私たち」という社説を使いました。神は主権的かつ超自然的にエドムに対して他の国々を召集しましたが、これはおそらく自然な手段(つまり、エドムを倒して領土を乗っ取りたいという願望)を通してでした。諸国民の間に送られた使者はおそらく、エドムを滅ぼすという神が諸国民に与えた願望を体現したものです。その願望は、霊的な観点から見ると、神の使者でした。あるいは、伝達者は、メッセージを伝えるために権威者によって派遣された文字通りの使者を指すこともあります。^[34]

B. エドムの防御の突破 2-4節

2-9 節には 3つの箇所が含まれており、「主のことば(英語でDeclares the LORD 「主が宣言される」)」というフレーズで区切られています(4、8 節)。

2節 ヤハウエはオバデヤの聴聞者たちに呼びかけて、性格のためにすでに軽蔑されていたエドムを「国々の中で小さい者」にするよう命じました。つまり、神はエドムをさらにへりくだらせるということです。

3節 エドムの国民性の際立った特徴は誇りでした。誇りを意味するヘブル語(zadon)は、沸騰する(zid)を意味する動詞に由来しています。鍋の熱で沸騰する水としてのプライドをイメージしています。同様に、高慢な人は、自分自身を押し上げる泡のようなものですが、中身は空洞です。興味深いことに、エドム人の父エサウが長子の権利を無駄遣いしたという記述の中に同じヘブル語が3回出てきます(創世記25:27-34)。

「…この本の中心的な道徳的教訓を解く鍵は、3節の次の言葉にあります。『おまえの高慢は、おまえ自身を欺いている。』」^[35]

「誇りとは何か? その定義を教えよう: 心の誇りとは、神なしでも生きられる能力を宣言する人生の態度である。」^[36]

「クリスチャンも高慢の罪に陥る可能性がある。人はただ神を計算から外し、聖書を見下す習慣を身につけ、日々神と二人きりになれないだけでよいのである。そうすれば彼もまた、神と神の意志を最優先にせず、世俗的な基準で決断を下し人生を生きるという罪に陥るかもしれない。」^[37]

エドム人は、セイル山という高地に住んでいたため、自分たちが他の人々よりも優れていると考えていました。彼らは、この軍事的に有利な場所を占領しているため、自分たちは安全だと考えていました。実際、彼らは自分たちが無敵だと思っていました。

「エドムの自然に対する防御は堂々としたものだった。その文明の主要な中心は死海の南東の狭い山地の尾根に位置していた…この尾根は北部全域で高さ4,000フィートを超え、南部では5,700フィートに達した。その高さは、そこから西のアラバと東の砂漠に向かって放射状に広がっている峡谷によって、さらに近づくことができなくなった…これらの自然の要塞に加えて、エドムは、特に東の辺境において、一連の鉄器時代の要塞によって強力に守られていた。そこでは陸地が徐々に砂漠へと下がっていった。」[\[38\]](#)

見えている岩（ヘブル語.sela'）は、セイル山を構成していた花崗岩と砂岩です。セラはエドム人の町の名前でもありましたが（第二列王記14:7参照）、ここでは国民全体の故郷の山が見えているようです。「セラ」のギリシャ語訳はペトラで、古代セラに非常に近いヨルダンの町の現代名です。

「セラ」は、8世紀初頭にユダが占領したエドム人の遺跡であるセラという地名であると理解できる（第二列王記14:7）。セラは、その後のナバテア人の首都であるペトラ、より具体的にはペトラの Umm el-Biyaraと同一視されることがよくある。しかし、エドム北部のブセイラ（ボズラ）の北西数キロに位置するキルベツ・シルという別の場所も提案されている…どちらの場所も急な斜面を備えた孤立した岩山であり、それぞれに簡単に防御できる手段が1つしかない。考古学的証拠はまだこの問題を解決していない…」[\[39\]](#)

4節 ここでは、前の節でも見えていた鷲の姿がはっきりと現れます。たとえエドム人が星と同じくらい高いところに「巣」を建てたとしても（誇張表現）、神は彼らを倒すでしょう。誇張とは、強調するための表現です。アッシリアのセンナケリブ王とアッシリアのアシュルナツィルパル2世王は、それぞれの年代記の中で同じ人物を使って自分たちの安全を誇っていました。[\[40\]](#)

「エドム人の遺跡のほとんどは死海の南東の高原に位置しており、北は深く切れ込んだワディ・エル・ハサ（聖書のゼレド）、西はアラバの地溝帯、そしてワディ・ヒスマに隣接していた。」[\[41\]](#)

エドム人は人間的には難攻不落であったかもしれませんが、神的には難攻不落ではありませんでした。彼らは誇らしげに「誰が私を地に引きずり降ろせるだろうか？」と自慢していましたが、(3節)しかし、主は「わたしはおまえをそこから引きずり降ろす」(4節)と答えられました。神は彼らのバブルを崩壊させるでしょう。彼自身がそうすると宣言したからです。

「エドムは反キリストの一種である（イザヤ14:13;ダニエル8:10;11:37）。」[\[42\]](#)

約400年後に書いたマラキは、当時エドム人がまだ存在していたと述べています(マラキ1:3-4)。紀元前 312 年までに エドムの首都はナバテ人の手に渡り、エドム人は生き続けましたが、エドムは国家としては存在しなくなりました。彼らはイドマヤ人として知られるようになりました。ヘロデ大王はイドマヤ人でした。

C. エドムの宝の略奪 5-7節

5-6節 泥棒は家を強盗し、ブドウ収穫者はブドウ畑を剥ぎ取りましたが、どちらも持ち去らずに少しだけ置き去りにしました。しかし、ヤハウェによるエドムの滅ぼしは完全であり、エドムには何も残りませんでした(エレミヤ 49:9-10参照)。主がイスラエルのどこかに残すと約束した残りの者とは対照的に、エドムの残りの者は残らないでしょう(イザヤ17:6;24:13;他)。この保証を構成するヘブル語の響きは、イスラエル人の嘆きの響きに似ています。人間も物質も含め、あらゆる種類の隠された宝は、ヤハウェの全知の目から逃れることはできません(4節参照)。

7節 エドムの同盟者たちは友人を裏切ることになります。したがって、エドムは自分自身を欺くだけでなく、彼女の信頼できる同盟者たちもエドムを欺くことになります。彼らは、古代近東では最も卑劣なこと、すなわち、契約の相手との契約を破ることを行いました(詩篇55:20、アモス1:9参照)。エドムの同盟者たちは最悪の敵であることが判明します。エドムが最も必要としているときに彼らはエドムを助けることをしませんでした。この聖句における契約の不誠実に関する 3 つの並行した記述は、その裏切りが確実であることを保証しています。さらに、この不誠実さはエドム人を完全に驚かせる(「待ち伏せ」する)ことになります。

「エドムは軍事的に弱く、人口が少なく、農業の富も限られているため、強力な軍隊を戦力することができなかった。したがって、ユダのネゲブを攻撃し、エルサレムの略奪を助ける能力は、より強力な国家、特にバビロンとの卑劣な[奴隸的、従順な]同盟に依存していた。」[\[43\]](#)

先ほど引用した著者は、バビロニア人がエルサレムを破った後にオバデヤが書いたと信じています。

D. エドムの指導者の破壊 8-9節

「オバデヤの議論は、神の介入と人間の手段というテーマをうまく織り交ぜている。」[\[44\]](#)

8節 4節の「主は宣言する」という言葉の繰り返しは、この裁きにおけるヤハウエの主導権を改めて強調しています。「その日」とは、明確ではないものの、ヤハウエが確実にエドムを滅ぼすであろう特定の日を指します。

同盟者の不誠実を見逃してもらうことによって(7節)、神はエドムの有名な博士たち(第一列王4:30、ヨブ記 1:1、2:11、4:1、15:17-19、箴言 30:1、31:1、エレミヤ49:7 参照)；哀歌 4:21；バルク 3:22-23)、そして彼らの理解力を打ち砕きました。彼らはまた、自分たちの安全を過大評価していました(3節)。

「バビロンやエジプトとの交流や、ヨーロッパとインドを行き来するキャラバンを通じて収集した情報のおかげで、エドムは知恵に関してうらやましがられる評判を得ていた。」^[45]

「エサウの山」(9、19、21節参照)とはセイル山のことで、神がエサウとその子孫に住まわせるように与えた山です(申命記2:5)。

9節 エドムの「戦士」とは、賢者(8節)または国の戦士と同義語である可能性があります。戦士たちは賢者たちとともにメリズム、つまり2つの部分が全体、この場合はエドム人全員を表す比喻表現を形成しています。国家の主要な資源である戦士たちは、盟約のパートナーが裏切り者であることが判明したとき、自信を持つどころか落胆しました。

テマンはエドム中央部(おそらく現代のヨルダン南部のタウィラン)^[46]と町周辺地域の両方で著名な町でした(創世記 36:10-11 参照)。しかし、その名前は(換喩により)国全体を表します。このすべての欺瞞と破壊の終わりは、エドムの完全な終焉となるでしょう。

II. ユダに対するエドムの犯罪 10-14節

10節は、1節が2節から9節に関して述べたのと同じ方法で、11節から14節で詳しく述べられていることを要約しています。

A. 告訴状 10節

高慢だけが神がエドムをへりくだらせた理由ではありませんでした。エドム人はまた、神が祝福することを意図していた人々であるイスラエル人をも呪っていました(創世記27:40-41、出エジプト記15:15、民数記20:14-21、申命記2:4、士師記11:17-18；第一サムエル記 14:47-48；第二サムエル記 8:13-14；第一列王記 11:15-16；第一歴代誌 18:11-13；詩篇 60；他)。このことにより、彼らは神の怒りを被ったのです(創世記12:3)。^[47]「暴力」と訳されているヘブル語(ハマス)の意味には、道徳的不正と肉体的残虐行為の両方が含まれます。この暴力はエドムの「兄弟」ヤコブ(つまりイスラエル人)に対するものであったため、特に卑劣

なものでした。その結果、エドムは大きな恥辱に覆われ(2節参照)、神はエドムを永遠に断ち切ることにあります。(9節参照)おそらくオバデヤはより印象的な双子の兄弟エサウを侮辱するためにイスラエルの名をヤコブと呼んだのかもしれませんが。[\[48\]](#)

B. 告発の説明 11-14節

11節 神はエドムの「兄弟」に対する暴力の具体例を一つ挙げましたが、冒頭で説明したように、それがどの例なのかは不明です。ユダに対するエドムの裏切りは、過去の特定の「日」(機会)に起こりました。同様に、神の裁きは、将来の特定の「日」に下されることとなります(8節)。聖書の中で「日」は必ずしも 12 時間または 24 時間を指すわけではありません。それは時々、より長い期間を指しますが、期間として区別できる期間を指します(例、創世記 2:4)。

エドム人の罪は、イスラエル人が困っているときに助けることができなかったことです(ルカ10:31-32参照)。むしろ、彼らはイスラエルの侵略者がエルサレムを略奪するのを、よそ見して大喜びで眺めていました。敵が都市の門を通過することは、その自治の喪失を意味しました。[\[49\]](#)

「石、骨、矢の軸、棒、立方体状の粘土の塊など、さまざまな種類の小さな物体がロットとして機能する可能性があるが、ヘブル語の名詞ゴラルはおそらく小さな石または小石を指す。おそらく、物体にはどうにかして印が付けられていたと推定できる …」[\[50\]](#)

神は、エドム人が兄弟を助けることができなかったために、エドム人もエルサレムの侵略者と同じ罪を犯したとみなされました。

「外見ではなく心をご覧になる神の目には、あからさまな罪と、それを野放しにしてしまうその罪に対する内なる偏見との間には、道徳的責任においてほとんど区別がない(マタイ 5:21-32)。」[\[51\]](#)

「…イスラエル人は常にエドムに対して友好的かつ兄弟的な態度を保つよう律法で命じられている(申命記2:4, 5)。そして申命記23:7章では、彼らの兄弟だからエドム人を憎んではいけないと命じられている。」[\[52\]](#)

12-13節 神はエドム人の罪の深刻さを、並行用語で8回非難することによって強調されました(12-14節)。7節の同じ並列構造を比較してください。ここでは 3 回の肯定的な繰り返しがあります。ヘブル語本文には、災害を表す単語 ('edam) がエドム ('edom) に似ているため、語呂合わせもあります。

この際、物理的な暴力以上に敵対的な態度(「ほくそ笑む」、「喜ぶ」、「誇る」)ことが、イスラエル人に対するエドムの大きな罪でした。血のつながりは契約のつながりさえも超えたはずです。エドムの同盟者たちは彼女との契約の関係を破るでしょうが(7節)、彼女はイスラエルとの血のつながりを裏切りました。

「嘲笑はプライドから生まれる。他人を嘲笑するとき、私たちは自分自身の精神を明らかにする。嘲笑は兄弟愛の欠如を示す。それは多くの場合、本当の憎しみの証拠である。」[\[53\]](#)

「神は、敵の災いを喜ぶ者たちに激しい災いを送る(箴言 17:5; 24:17、18)。同様の場合のダビデと神聖なダビデの子の反対の行為を比較してみなさい(詩篇35:13-15)。」[\[54\]](#)

14節 最終的には身体的な争いも登場しました。エルサレムからのユダヤ人の逃亡者たちが街を離れると、エドム人は道の分岐点で彼らに会い、侵略者から逃げるのを助けるのではなく、彼らを殺害しました。

「エドム人は、ユダ/エルサレムの逃亡者たちが逃げて別の方向に散らばる前に、彼らを最も簡単に捕まえることができる場所に陣を張った(エレミヤ48:12参照)。、2つの道路に陣を張るよりも、道の分岐点で監視する方が簡単である。」[\[55\]](#)

他のエドム人は逃亡するユダ人に避難を与える代わりに投獄しました。これは詩的な誇張である可能性があります、本文には誇張を示すものは何もありません。エドムの行動に関するその他の記述はすべて文字通りのものであるように見えます。

英語の翻訳によっては、12-14節を未来について言及しているものと解釈しているものもありますが、過去について言及しているものと解釈しているものもあります。ほとんどの解説者は、当時のことを過去のこととして(神はすでに起こったことを描写していると捉えています)捉えています。[\[56\]](#)少数派の解説者は、これを未来として捉え、将来起こるであろう何かを説明する人もいます。[\[57\]](#)これは裁きの神託であるため、神がエドムに裁きを告げたのは、エドムが将来行うであろう何かに対してではなく、すでに行ったことに対してであった可能性が高いと思われる。エドムは高慢であり(2節)、また暴力的でもありました(10節)。

ケイルは、オバデヤは過去に起こった出来事と、将来再び起こるであろう別の出来事について言及している、つまり過去の出来事は将来の再発の典型であると提案しました。[\[58\]](#)

これらの聖句で明らかになっている可能性の高い歴史的出来事は 2 つあります。まず、エドムとの緊張期間中にエホラム王の家族と財産を奪ったアラブ人とペリシテ人の連合軍による侵略です(第二列王記 8:20-22) ; 第二歴代誌、20:1-2; 21:8-17; 22:1)。2番目に考えられる出来事は、紀元前586年のネブカドネザルによるエルサレムの崩壊です。(第二列王記24:13-16; 25:4-17; 第二歴代誌 36:18,20; 詩篇 137:7; エレミヤ 9:26; 25:21; 27:3; 40:11;エゼキエル25:12; 32:29; 35:3-9、11-15; 36:2-7; 哀歌1:17; 2:15-17; 4:21-22)。この説明の導入部分で説明したように、信頼できる解説者の間では、これらの機会のどれを視野に入れているかについて意見が分かれています。

III. イスラエルの主権の回復 15-21節

多くの預言書と同様に、この本も将来のイスラエルの回復の約束で終わります。

A. エドムと諸国民の裁き 15-18節

主の働きと言葉への言及がこの箇所を構成します。オバデヤは、エドムとすべての国々に運命の逆転が訪れると告知しました。

15節 ここでの「主の日」とは、神がイスラエルと諸国民の運命を逆転させる将来の日のことです(8節参照)。「主の日」とは、預言者が書くときによく使われる用語で、一般に神がご自身の意志を達成するために人間の事柄に介入されるときを指します。オバデヤが告知した日は、神が人類の事柄における支配を確立する日、すなわち、イエス・キリストが再び地上に統治し統治する日となります。オバデヤは、その日が近づいていると語りました。エドムと他の国々がイスラエルにしたように、神はその日、全く同じ裁きをもって彼らに報いを与えるでしょう(レビ記 24:20、申命記 19:21、ガラテヤ 6:7 参照)。

「重要な聖句は15節である:『おまえは、自分がしたように、自分にもされる。』」[\[59\]](#)

「神は報われない悪を許さないことですべての人に対する主権を示すだけでなく、犯罪を超える刑罰を許さないことで正義も示す。」[\[60\]](#)

再臨の前に国家としての終焉をもたらしたエドムの懲罰は、彼女に対する神の裁きの一部でしたが、預言者は、終末(終末)で最高潮に達するエドムと諸国民に対する神の裁きのすべてを見ていました。すべての預言者は、互いに関連して預言した将来の出来事のタイミングを理解するのが困難でした(第一ペテロ1:11参照)。

「したがって、15 節の冒頭の行は、オバデヤの預言の核心を構成している。それは、それまでの節に神学的枠組みを提供している。エドムとエルサレムに降りかかる局地的な災害は、遠く離れた取るに足らない戦争の舞台での単に孤立した出来事ではない。『決して滅びることのない王国』を築くために近づいている主ご自身の足跡である(ダニエル2:44)。そして次の聖句は本質的に、差し迫ったその『日』の意味についての解説である。」[\[61\]](#)

「エドムはすべての国の典型として示されている。」[\[62\]](#)

16節 エドムは、兄イスラエルを助けることができなかったとき、主の聖なる山エルサレムで「一日」を過ごしました。[\[63\]](#)同様に、すべての国々は、「異邦人の時」に、エルサレムとユダヤ人を支配する「日」を迎えることになります(ルカ21:24)。私たちは「異邦人の時代」を生きています。この歴史の時代は、紀元前586年にネブカドネザルがイスラエルの主権を剥奪したときに始まり、イエス・キリストが地上に再臨してイスラエルの主権を回復したときに終わります。

「異邦人の時」において、イスラエルは現在「異邦人に踏み荒らされています」(ルカ21:24)。オバデヤは、イスラエルの敵がイスラエル人に対する支配を祝って絶えず酒を飲んでいと描写しました(出エジプト32:6、第一サムエル30:16参照)。彼らは錯乱するまで祝っていましたが、神は彼らを滅ぼし、まるで存在しなかったかのようにしてしまいます。彼らは主の怒りの杯を飲むこととなります(詩篇 60:3、75:8、イザヤ 51:17-23、エレミヤ 25:17-26、28-29、49:12-13、ハバクク 2:15-16)。[\[64\]](#)

「この聖句は、残っている国々の痕跡を明らかに排除しているようだが、千年王国[地上におけるキリストの千年間の統治]には、さまざまな国々の名残が存在する(イザヤ2:2-4;アモス 9:12; ミカ 4:1-3; ゼカリヤ14:16-19)。これら 2 つの考えはどのように調和されるのだろうか? 答えはおそらく、千年王国以前と千年期中の国家概念の違いにある。地上では国々は自らが主権者であると考えており、個人の権利を維持するために戦っていた。しかし、キリストが再臨されるとき、そこに入るのは主の御名を呼んだ諸国の人々だけであった。また、彼らは一人の王の下に置かれ、もはや国家に対する脅威ではなくなった。」[\[65\]](#)

17節 イスラエルの未来(回復)はエドムの未来(破壊)と対照的です。将来の裁きの時(患難時代)には、エルサレムから逃げ出す人々、すなわち多くのユダヤ人が現れるでしょう(ゼカリヤ13:8、黙示録12:13-17参照)。一部の作家はこれを西暦 70 年のエルサレム陥落中に起こったとみなしました

た。^[66]しかし、この聖句が予言しているように、エルサレムは聖くなることなく、ヤコブの家はその出来事の後、所有物を所有しませんでした。この都市は最終的には聖なるものとなり(再臨のとき)、ヤコブの家はエサウの家とは対照的に、神が彼らに持つよう意図されたものを(千年王国に)所有することになります。

18節 そしてイスラエル人は、火が「刈り株」を焼き尽くすようにエドム人を焼き尽くすことになる(藁。出エジプト15:7、イザヤ10:17、ヨエル2:5、ゼカリヤ12:6、マラキ4:1、マタイ3:12; ルカ3:17)。火は聖書の中で神の裁きの道具としてよく描かれています(申命記28:24、32:22)。エドム人は残りませんでした(8-9節、民数記24:18、イザヤ11:13-14、エゼキエル25:13-14、アモス9:12)が、イスラエル人はエルサレムから逃れることができました(17節)。

「オバデヤは、この箇所とこの部分だけで、ヨセフの家、すなわち十部族について明確に言及しているが、これは、十部族が将来の救いから締め出されるという考えを防ぐためである。」^[67]

ヤコブの家は、ヨセフの家とは対照的に、南ユダ王国を指します。この予言は、再臨後、千年王国におけるキリストによる救い主の統治が始まる前に、諸国民の裁きの際に最終的に成就するでしょう。ヤハウエは再び、ご自身の言葉によってこの預言の正確性を保証されました(4、8節参照)。

「18節のようないくつかの聖句は、千年王国直前の諸国民の裁きへのイスラエルの軍事参加について語っている(ゼカリヤ12:1-9、マラキ4:3[マタイ3:21])。他のものでは、主がご自分の民に代わって裁きを執行される様子が描かれている(ヨエル3:12[マタイ4:12]、ゼカリヤ14:3-5、マタイ25:31-46参照)。出来事の正確な順序を再構築することは難しい。いずれにせよ、資料の多くは明らかに厳密には時系列ではない。」^[68]

オバデヤの預言の後、エドム人の運命は何世紀にもわたって栄枯盛衰を繰り返しました。ヘロデ大王(マタイ 2:1-17)、ヘロデ アンティパス(ルカ 13:31-32; 23:7-12)、ヘロデ アグリッパ 1 世(使徒 12:1-11、23)を含むヘロデ家は、全員エドム人の子孫でした。しかし、紀元前 2 世紀になると、ユダヤ人や他の敵が事実上エドム人を焼き尽くしました。エドム人は国家としてのアイデンティティと自治権を失い、それを取り戻すことはできませんでした。したがって、イスラエルによるエドム国家の最終的な破壊はずっと昔に起こったということです。

「…マカベア家とハスモン家がこれらの地域をイスラエルのために取り戻したとき、オバデヤの神託が部分的に成就したと言えるだろう。」^[69]

この埋め立ては紀元前 2 世紀に行われました。しかし、オバデヤはエドムだけではなく「すべての国民」(16節)について話しました。彼はイスラエル人を支配していた異邦人の勢力がすべて滅ぼされることを予見していました。もしユダヤ人がイエス・キリストを救世主として受け入れていたら、イエスは十字架と復活の直後に統治を始めていただろう。彼らがイエスを拒否したので、多くの預言者が予言した国々の最終的な裁きはまだ先のことです。

B. イスラエルによるエドムの占領 19-21節

この聖書からの引用(本文の部分)にも、前のものと同様に、「エサウの山」(19、21 節)という枠組みのフレーズがあります。もちろん、この山は主の聖なる山、シオン山(16-17節)とは対照的です。

19-20節 オバデヤは、ユダの各地に住んでいるユダヤ人が、他の国々が以前占領していた約束の地の一部を所有するだろうと預言しました(イザヤ66:8、ゼカリヤ12:10-13:1、14:1-9参照)。これらの地域には、セイル山(エドム)、フィリステア、そしてエフライムとサマリア(北王国)、トランスヨルダン(ギルアデ)を含むユダの北の領土が含まれていました。

かつて亡命していたイスラエル人は、北部のツアレファテ(現在のレバノン)付近とセファラデ(おそらく現代のトルコのサルデイス、あるいはメディアかスペインの領土^[70])に住んでいましたが、戻ってきて土地の南部、つまりネゲブを占領することになります。セファラデの位置は依然として謎のままです。

『ツアレファテ』への言及は、『カナン人』という用語がカルメル山の北の海岸沿いの住民、つまりフェニキア人を指すことを示している。ヘブル語聖書では通常、フェニキア人に対して『シドン人』という用語が使用されているが、オバデヤは、動詞『yrs』(所有する)と『ペリシテ人』と『カナン人』という名前を使用することで、将来のイスラエルの復興を別の征服・定住期として描いている… ^[71]

イスラエルは再びその地を征服するでしょうが、今度は完全に征服し、神がアブラハムに約束したすべての領土を占領することになります(創世記13:14-17、26:2-5、28:13-15、申命記1:7参照)。ネゲブの都市はイスラエルの最南端にあり、ザレパトはイスラエルの最北端にありました。

「…最近の考古学研究により、7世紀から6世紀初頭にかけてネゲブにおけるエドム人の存在が増大していたことが明らかになった…おそらくオバド20は、イスラエルが将来ネゲブの町をエドム人の支配から取り戻すことを予想しているのかもしれない。」^[72]

「オバデヤの預言は成就したのだろうか？マラキの時代(紀元前約450年)までに、エドムは壊滅的な敗北に苦しんでいた(マラキ1:1-4参照)が、オバデヤが想像していたほどの規模ではなかった。エドムの裁きについてのオバデヤの記述は、おそらくある程度は定型化され、大袈裟に表現されている。しかし、預言の宇宙的次元は歴史的展開を超え、世界規模の終末の審判を示している。このより大きな終末論的な文脈で見ると、エドムは神の怒りの裁きによって打ち碎かれるすべての神の敵の原型として機能している(イザヤ34章および63:1-6も参照)。」^[73]

「イスラエルは神が彼らに約束したすべての土地を占領するだろう。神はアブラハムに約30万平方マイルの土地を約束していた。彼らの最盛期でさえ、彼らは約3万平方マイルしか占領していなかった。」^[74]

21節 要約すると、ユダヤ人を神が意図した運命に引き渡す者たちはシオン山に登り、セイル山で裁きました(士師記3:9、15参照)。エドムがイスラエルに勝つことはありませんが、ヤハウェが主権者であることが証明されます(1節参照)。彼の地上の王国は約束の地全体、イスラエルの敵がかつて占領していた地域、そしてかつて彼らに敵対していた人々の上にも広がるでしょう。ヨシュアが始めたが完了しなかった土地の征服は、その時完了するでしょう。このようにして、オバデヤの預言、つまりこの二つの山の描写は、ヤハウェの王国がすべての国々を支配し、ヤハウェが王の中の王、主の中の主としてクライマックスで終わります(黙示録19:16、20:4参照)。この節は明らかに救世主的なものです。

「これほど崇高な終わりを持った預言者はいない…人間が支配する帝国も、この世のどの国家も永遠に続くことはない。すべてはいつか、主イエス・キリストが孤独な栄光で君臨する永遠の王国に統合されるだろう。」^[75]

千年紀の解釈者(キリストが将来地上を統治すると信じない人たちは、新約聖書のイスラエルへの言及を教会への言及として解釈します。彼らはオバデヤの預言の成就を、旧約聖書のイスラエルが約束の地における将来の主権を回復することに見るのではなく、教会がすべての敵に対する最終的な勝利に見るのです。^[76] 前千年王国主義者(キリストが将来地球を支配すると信じる人々)は、神がイスラエルと言ったのはイスラエルのことだと信じているため、この「置き換え神学」(神の計画において教会がイスラエルに置き換わる)を拒否します。クリスチャンはアブラハムの霊的な種であるから、教会はイスラエルの霊的な種であると結論付けるのは正しくないと私たちは信じています。

エドム国民がイスラエル人に反対したように、イエスの時代のエドム人(ヘロデ大王とその後継者)もイエス・キリストとその追隨者に反対しました。私たちの主イエス・キリストは、イスラエル国家のあるべき姿のすべてを成就された方でしたが、幼少のイエスを殺そうとしたヘロデの敵意の個人的な焦点となりました。しかし、ヘロデは失敗しました。同様に、イスラエルとイスラエルのメシアのすべての敵は、救い主を排除することに失敗し、そうしようとして自ら滅びを経験することになるでしょう。

Bibliography

- Aharoni, Yohanan. *The Land of the Bible: A Historical Geography*. Revised ed. Translated by Anson F. Rainey. Philadelphia: Westminster Press, 1979.
- Aharoni, Yohanan, and Michael Avi-Yonah. *The Macmillan Bible Atlas*. Revised ed. New York: Macmillan Publishing Co., 1977.
- Allen, Leslie C. *The Books of Joel, Obadiah, Jonah and Micah*. The New International Commentary on the Old Testament series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1976.
- Archer, Gleason L., Jr. *A Survey of Old Testament Introduction*. Revised ed. Chicago: Moody Press, 1974.
- Armerding, Carl E. "Obadiah." In *Daniel—Minor Prophets*. Vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*. 12 vols. Edited by Frank E. Gaebelein and Richard P. Polcyn. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1985.
- Atlas of the Bible Lands*. Maplewood, N.J.: C. S. Hammond & Co., 1959.
- Baker, David W. *Obadiah, Jonah, Micah: An Introduction and Commentary*. Tyndale Old Testament Commentaries series. Leicester, Eng., and Downers Grove, Ill.: Inter-Varsity Press, 1988.
- Baker, Walter L. "Obadiah." In *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, pp. 1453–59. Edited by John F. Walvoord and Roy B. Zuck. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1985.
- Barker, Harold P. *Christ in the Minor Prophets*. New York: Loizeaux Brothers, n.d.
- Baxter, J. Sidlow. *Explore the Book*. 1960. One vol. ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Beitzel, Barry J. *The Moody Atlas of Bible Lands*. Chicago: Moody Press, 1985.
- Bramer, Stephen J. "Suffering in the Writing Prophets (Isaiah to Malachi)." In *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, pp. 147–59. Edited by Larry J. Waters and Roy B. Zuck. Wheaton: Crossway, 2011.
- Bright, John. *A History of Israel*. Philadelphia: Westminster Press, 1959.

Chisholm, Robert B., Jr. *Handbook on the Prophets*. Grand Rapids: Baker Book House, 2002.

_____. *Interpreting the Minor Prophets*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1990.

_____. "A Theology of the Minor Prophets." In *A Biblical Theology of the Old Testament*, pp. 397–433. Edited by Roy B. Zuck. Chicago: Moody Press, 1991.

Darby, John Nelson. *Synopsis of the Books of the Bible*. Revised ed. 5 vols. New York: Loizeaux Brothers Publishers, 1942.

Dyer, Charles H., and Eugene H. Merrill. *The Old Testament Explorer*. Nashville: Word Publishing, 2001. Reissued as *Nelson's Old Testament Survey*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 2001.

Eichrodt, Walther. *Theology of the Old Testament*. 5th ed. revised. 2 vols. Translated by John A. Baker. The Old Testament Library series. Philadelphia: Westminster Press, 1961 and 1967.

Emmons, Richard. "Obadiah." In *Surveying the Old Testament Prophetic Books*, pp. 305–11. Learn the Word Bible Survey series. Edited by Paul D. Weaver. N.c.: Learn the Word Publishing, 2021.

Feinberg, Charles Lee. *Joel, Amos, and Obadiah*. The Major Messages of the Minor Prophets series. New York: American Board of Missions to the Jews, 1948.

Finley, Thomas J. *Joel, Amos, Obadiah*. The Wycliffe Exegetical Commentary series. Chicago: Moody Press, 1990.

Freeman, Hobart E. *An Introduction to the Old Testament Prophets*. Chicago: Moody Press, 1968.

Gaebelein, Arno C. *The Annotated Bible*. 4 vols. Reprint ed. Chicago: Moody Press, and New York: Loizeaux Brothers, 1970.

Gaebelein, Frank E. *Four Minor Prophets: Obadiah, Jonah, Habakkuk, and Haggai*. Chicago: Moody Press, 1970.

Glueck, Nelson. *The Other Side of the Jordan*. Cambridge, Mass.: American Schools of Oriental Research, 1970.

Goswell, Greg. "The Order of the Books in the Hebrew Bible." *Journal of the Evangelical Theological Society* 51:4 (December 2008):673–88.

Grayson, Albert K. *Assyrian Royal Inscriptions*. 2 vols. Records of the Ancient Near East 1–2. Wiesbaden, Germany: Harrassowitz, 1972–76.

Hanna, Kenneth G. *From Moses to Malachi: Exploring the Old Testament*. 2nd ed. Edited by Roy B. Zuck. Bloomington, Ind.: CrossBooks, 2014.

Harrison, R. K. *Introduction to the Old Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1969.

Hassler, Mark A. "The Setting of Obadiah: When Does the Oracle Concerning Edom Transpire?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 59:2 (2016):241–54.

Henry, Matthew. *Commentary on the Whole Bible*. One volume ed. Edited by Leslie F. Church. Grand Rapids: Zondervan Publishing Co., 1961.

Huffmon, Herbert B. "The Covenant Lawsuit in the Prophets." *Journal of Biblical Literature* 78 (1959):285–95.

Ironside, Harry A. *Notes on the Minor Prophets*. New York: Loizeaux Brothers, 1947.

Jacob, Edmond. *Theology of the Old Testament*. Translated by Arthur W. Heathcote and Philip J. Allcock. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1958.

Jamieson, Robert; A. R. Fausset; and David Brown. *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

Kaiser, Walter C., Jr. *Toward an Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1978.

Keil, Carl Friedrich. *The Twelve Minor Prophets*. 2 vols. Translated by James Martin. Biblical Commentary on the Old Testament. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1949.

Livingston, G. Herbert. "Obadiah." In *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 839–42. Edited by Charles F. Pfeiffer and Everett F. Harrison. Chicago: Moody Press, 1962.

Longman, Tremper, III and Raymond B. Dillard. *An Introduction to the Old Testament*. 2nd ed. Grand Rapids: Zondervan, 2006.

Luckenbill, Daniel D. *The Annals of Sennacherib*. Oriental Institute Publications 2. Chicago: University of Chicago Press, 1942.

McGee, J. Vernon. *Thru the Bible with J. Vernon McGee*. 5 vols. Pasadena, Calif.: Thru The Bible Radio; and Nashville: Thomas Nelson, Inc., 1983.

Merrill, Eugene H. *Kingdom of Israel: A History of Old Testament Israel*. Grand Rapids: Baker Book House, 1987.

Morgan, G. Campbell. *An Exposition of the Whole Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1959.

_____. *Living Messages of the Books of the Bible*. 2 vols. New York: Fleming H. Revell Co., 1912.

_____. *The Unfolding Message of the Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1961.

The Nelson Study Bible. Edited by Earl D. Radmacher. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.

The New American Standard Bible. La Habra, Cal.: The Lockman Foundation, 2020.

The New Bible Dictionary. Edited by J. D. Douglas. 1962 ed. S.v. "Sepharad," by D. J. Wiseman, p. 1160.

The New Scofield Reference Bible. Edited by Frank E. Gaebelein, William Culbertson, et al. New York: Oxford University Press, 1967.

Niehaus, Jeffrey. "Obadiah." In *The Minor Prophets: An Exegetical and Expositional Commentary*, 2:495–541. 3 vols. Edited by Thomas Edward McComiskey. Grand Rapids: Baker Books, 1992, 1993, and 1998.

Oswalt, John N. "Is There Anything Unique in the Israelite Prophets?" *Bibliotheca Sacra* 172:685 (January–March 2015):67–84.

Payne, J. Barton. *The Theology of the Older Testament*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1962.

Pusey, E. B. *The Minor Prophets*. Barnes on the Old Testament series. 2 vols. Reprint ed. Grand Rapids: Baker Book House, 1973.

Raabe, Paul R. *Obadiah*. The Anchor Bible series. New York, et al.: Doubleday, 1996.

Rasmussen, Carl G. *Zondervan Atlas of the Bible*. Grand Rapids: Zondervan, 2010.

Robinson, George L. *The Twelve Minor Prophets*. N.c.: Harper & Brothers, 1926; reprint ed., Grand Rapids: Baker Book House, 1974.

Smith, Billy K., and Frank S Page. *Amos, Obadiah, Jonah*. The New American Commentary series. N.c.: Broadman & Holman Publishers, 1995.

Smith, George Adam. *The Book of the Twelve Prophets Commonly Called the Minor*. 2 vols. Vol. 1: 10th ed. Vol. 2: 7th ed. The Expositor's Bible. Edited by W. Robertson Nicoll. London: Hodder and Stoughton, 1903.

Stuart, Douglas. *Hosea-Jonah*. Word Biblical Commentary series. Waco: Word Books, 1987.

Student Map Manual: Historical Geography of the Bible Lands. Jerusalem: Pictorial Archive (Near Eastern History) Est., 1979.

Swindoll, Charles R. *The Swindoll Study Bible*. Carol Stream, Ill.: Tyndale House Publishers, 2017.

von Rad, Gerhard. *Old Testament Theology*. 2 vols. Translated by D. M. G. Stalker. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1962 and 1965.

Waltke, Bruce K. *An Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 2007.

Watts, John D. W. *Obadiah: A Critical Exegetical Commentary*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1969.

Wiersbe, Warren W. "Obadiah." In *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, pp. 371-75. Colorado Springs, Colo.: Cook Communications Ministries; and Eastbourne, England: Kingsway Communications Ltd., 2002.

Wood, Leon J. *The Prophets of Israel*. Grand Rapids: Baker Book House, 1979.

Young, Edward J. *An Introduction to the Old Testament*. Revised ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1960.

Young, Rodger C. "When Did Jerusalem Fall?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 47:1 (March 2004):21–38.

[1]C. F. Keil, "Obadiah," in *The Twelve Minor Prophets*, 1:337.

[2]See Bruce K. Waltke, *An Old Testament Theology*, p. 828–32. Form critics are those scholars who analyze the biblical text on the basis of its literary arrangement and style.

[3]For further discussion of the book's unity, see especially John D. W. Watts, *Obadiah: A Critical Exegetical Commentary*, pp. 9–10; Leslie C. Allen, *The Books of Joel, Obadiah, Jonah and Micah*, pp. 133–35; and Tremper Longman III and Raymond B. Dillard, *An Introduction to the Old Testament*, pp. 439–40.

[4]Gleason L. Archer Jr., *A Survey of Old Testament Introduction*, p. 299.

[5]E.g., Mark A. Hassler, "The Setting of Obadiah: When Does the Oracle Concerning Edom Transpire?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 59:2 (2016):241–54.

[6]For arguments that Jerusalem fell in 587 B.C., see Rodger C. Young, "When Did Jerusalem Fall?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 47:1 (March 2004):21–38.

[7]E.g., George Adam Smith, *The Book of the Twelve Prophets Commonly Called the Minor*, 2:172; Robert Jamieson, A. R. Fausset, and David Brown, *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*, p. 802; Watts, pp. 8–9, 19, 27, 54; Allen, pp. 129–33; Douglas Stuart, *Hosea–Jonah*, pp. 403–4, 416; Thomas J. Finley, *Joel, Amos, Obadiah*, p. 340–42; Billy K. Smith, "Obadiah," in *Amos, Obadiah, Jonah*, p. 172; David W. Baker, *Obadiah, Jonah, Micah: An Introduction and Commentary*, p. 23; Carl E. Armerding, "Obadiah," in *Daniel–Minor Prophets*, vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*, p. 337; Frank E. Gaebelein, *Four Minor Prophets: Obadiah, Jonah, Habakkuk, and Haggai*, pp. 13, 28; G. Herbert Livingston, "Obadiah," in *The Wycliffe Bible Commentary*, p. 839; Roland K. Harrison, *Introduction to the Old Testament*, pp. 898, 902; John Bright, *A History of Israel*, pp. 356, 417; Robert B. Chisholm Jr., *Interpreting the Minor Prophets*, p. 110; idem. "A Theology of the Minor Prophets," in *A Biblical Theology of the Old Testament*, p. 418; idem, *Handbook on the Prophets*, p. 403; *The New Scofield Reference Bible*, p. 939; Waltke, p. 845; Paul R. Raabe, *Obadiah*, pp. 51, 55.

[8]E.g., Keil, 1:341–49; Arno C. Gaebelein, *The Annotated Bible*, 2:3:144; Walter L. Baker, "Obadiah," in *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, p. 1454; Hobart E. Freeman, *An Introduction to the Old Testament Prophets*, p. 136; Archer, pp. 299–303; Leon J. Wood, *The Prophets of Israel*, pp. 262–64; Eugene H. Merrill, *Kingdom of Israel: A History of Old Testament Israel*, p. 382; Walter C. Kaiser Jr., *Toward an Old Testament Theology*, p. 186; Edward J. Young, *An Introduction to the Old Testament*, p. 277; Charles H. Dyer, in *The Old Testament Explorer*, pp. 765–66; Warren W. Wiersbe, "Obadiah," in *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, p. 371; Kenneth G. Hanna, *From Moses to Malachi*, pp. 459–62. See especially Jeffrey Niehaus, "Obadiah," in *The Minor Prophets*, pp. 496–502.

[9]See John N. Oswalt, "Is There Anything Unique in the Israelite Prophets?" *Bibliotheca Sacra* 172:685 (January–March 2015):67–84.

[10]Allen, p. 129. Cf. B. K. Smith, p. 180.

[11]Stuart, p. 416. Quotations from the English Bible in these notes are from the *New American Standard Bible* (NASB), 2020 edition, unless otherwise indicated.

- [12]Freeman, p. 135. See also Greg Goswell, "The Order of the Books in the Hebrew Bible," *Journal of the Evangelical Theological Society* 51:4 (December 2008):673–88.
- [13]For defense of the priority of Obadiah to Jeremiah, see Niehaus, p. 501. For defense of the priority of Jeremiah to Obadiah, see E. B. Pusey, *The Minor Prophets*, 1:345–50; Raabe, p. 22–31.
- [14]See Pusey, 1:348–49.
- [15]See the Appendix at the end of these notes for a chart of the Dates of the Rulers of Judah and Israel.
- [16]Stuart, p. 408. Paragraph division omitted. See also Kaiser, p. 187; and Finley, p. 351.
- [17]Longman and Dillard, p. 438.
- [18]E.g., Archer, p. 302. Cf. v. 15.
- [19]E.g., J. Sidlow Baxter, *Explore the Book*, 4:142–43; Charles Lee Feinberg, *Joel, Amos, and Obadiah*, p. 124.
- [20]W. Baker, p. 1453.
- [21]Stuart, p. 404. For a synopsis of the relations between Edom and Israel, see Finley, pp. 345–48. Most commentaries and Bible encyclopedias contain a summary of Edom's history.
- [22]Stuart, p. 404. This writer provided a helpful table of all the nations that the writing prophets referred to and the locations of their prophecies against these nations on pp. 405–6.
- [23]Raabe, p. 33.
- [24]Stuart, p. 421. Cf. Judg. 5:4; Isa. 63:1–6.
- [25]See, for example, Herbert B. Huffmon, "The Covenant Lawsuit in the Prophets," *Journal of Biblical Literature* 78 (1959):285–95.
- [26]Niehaus, p. 507.
- [27]G. A. Smith, 2:180.
- [28]Baxter, 4:140.
- [29]Adapted from G. Campbell Morgan, *Living Messages of the Books of the Bible*, 1:2:213–25.
- [30]Watts, p. 42.
- [31]*Ibid.*, p. 47.
- [32]Raabe, p. 107.
- [33]For other maps of Edom, see Barry J. Beitzel, *The Moody Atlas of the Bible*; the Hammond *Atlas of the Bible Lands*; and Yohanan Aharoni and Michael Avi-Yonah, *The Macmillan Bible Atlas*, revised edition.
- [34]Raabe, pp. 113–14.
- [35]F. Gaebelein, p. 48.
- [36]J. Vernon McGee, *Thru the Bible with J. Vernon McGee*, 3:729.
- [37]F. Gaebelein, p. 52. This writer's discussion of the sin of pride in the light of today, on pp. 48–52, is worth reading.
- [38]Armerding, pp. 342–43. Paragraph division omitted.
- [39]Raabe, pp. 125–26.
- [40]See Daniel D. Luckenbill, *The Annals of Sennacherib*, p. 36; and Albert K. Grayson, *Assyrian Royal Inscriptions*, 2:122.
- [41]Raabe, p. 127. "Wadi" is an Arabic word that describes a valley, ravine, or channel that is dry except in the rainy season.
- [42]Jamieson, et al., p. 803.
- [43]Stuart, pp. 417–18.
- [44]Finley, p. 362.
- [45]Feinberg, p. 126.
- [46]Yohanan Aharoni and Michael Avi-Yonah, *The Macmillan Bible Atlas*, map 155; *Student Map Manual: Historical Geography of the Bible Lands*, map 9–2; Carl G. Rasmussen, *Zondervan Atlas of the Bible*, p. 300.

- [47] See Stephen J. Bramer, "Suffering in the Writing Prophets (Isaiah to Malachi)," in *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, p. 156.
- [48] Jamieson, et al., p. 803.
- [49] Niehaus, p. 529.
- [50] Raabe, p. 175.
- [51] Armerding, p. 348.
- [52] Keil, 1:360.
- [53] George L. Robinson, *The Twelve Minor Prophets*, p. 67.
- [54] Jamieson, et al., p. 803.
- [55] Raabe, pp. 184–85.
- [56] E.g., Finley, p. 340.
- [57] E.g., F. Gaebelien, pp. 5, 29.
- [58] Keil, 1:363.
- [59] Baxter, 4:140.
- [60] D. Baker, p. 38.
- [61] Armerding, p. 353.
- [62] D. Baker, p. 39.
- [63] Raabe, p. 204, believed that "you" refers to the Judahites here.
- [64] See *ibid.*, pp. 206–42, for an extended excursus on the "cup of wrath" figure.
- [65] Finley, p. 372.
- [66] E.g., Armerding, p. 354.
- [67] Keil, 1:370.
- [68] Finley, p. 373.
- [69] *Ibid.*, p. 374.
- [70] See *The New Bible Dictionary*, s.v. "Sepharad," by D. J. Wiseman, p. 1160; Watts, p. 64; Raabe, pp. 267–68.
- [71] *Ibid.*, p. 265.
- [72] *Ibid.*, p. 268.
- [73] Chisholm, *Handbook on ...*, p. 406.
- [74] McGee, 3:736.
- [75] F. Gaebelien, pp. 46–47.
- [76] E.g., Stuart, p. 422; Keil, 1:378; and Allen, p. 172.